



国際防災・人道支援フォーラム2007 —防災教育の取り組み— 報告書



国際防災・人道支援フォーラム実行委員会

(事務局:人と防災未来センター事業課)

〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1丁目5-2

Tel:078-262-5068 Fax:078-262-5082

<http://www.dri.ne.jp>

時 期:2007年1月22日(月) 13:00~16:30

場 所:JICA兵庫国際センター

この報告書は、「(財)ひょうご震災記念21世紀研究機構」及び「ひょうご安全の日推進県民会議」からの助成を受けて作成されました。



国際防災・人道支援フォーラム 2007

－ 防災教育の取り組み－ 報告書

目次

プログラム	-----	2
講師プロフィール	-----	3
開会挨拶	-----	4
基調講演	-----	5
「これからの防災教育」 国崎 信江		
パネルディスカッション	-----	9
矢守 克也	-----	9
中野 元太	-----	10
ムルヨノ	-----	12
ディスカッション	-----	14
参考資料	-----	19

主催：国際防災・人道支援協議会（DRA）、兵庫県

後援：内閣府、文部科学省、国連国際防災戦略事務局（UN/ISDR）、
日本ユネスコ国内委員会

基調講演・パネリスト



国崎 信江

横浜生まれ。91年外資系航空会社の機内通訳を経験後、退職。主婦となる。阪神・淡路大震災を契機に、自然災害から小さな子供を守るための研究を始める。現在、内閣府「中央防災会議首都直下地震避難対策等専門調査会」専門委員、「NPO国境なき技師団」理事などの他、東京都「子どもを守る災害対策検討会」委員、「防災サバイバルキャンプ体験サイト」策定委員など、「主婦」の目から見た子供向けの防災教育に関する活動を積極的に行っている。「地震からわが子を守る防災の本」(リベルタ出版)、「じしんのえほん こんなときどうするの?」(ポプラ社)など、防災教育に関する多数の著書を執筆している。

コーディネーター



矢守 克也

1988年 大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程単位取得。専門の社会心理学を生かした防災に関する研究活動の一環として、「防災ダック」や「防災すごろく」など子供向けの教材の制作を手がけるなど、防災教育についても取り組んでいる。現在、京都大学防災研究所で研究活動を行う他、人と防災未来センター震災資料研究主幹、自然災害学会「自然災害科学」編集委員会委員など多方面で活躍している。著書に、『ゲームで学ぶリスク・コミュニケーション:「クロスロード」への招待』(吉川肇子・網代 剛 共著、ナカニシヤ出版)、『〈生活防災〉のすすめー防災心理学研究ノート』(ナカニシヤ出版)等多数。

パネリスト



中野 元太

立命館大学国際関係学部国際関係学科学学生。兵庫県立舞子高等学校環境防災科時代は、近隣地域や県内の小中学校、高等学校での防災啓発活動を精力的に行う。新潟県中越地震では被災地を訪問し現地の高校生らと交流を行うなど災害ボランティア活動にも精力的に参加。2006年2月に環境防災科卒業生らと国際防災教育支援団体SIDEを設立。現在、防災教育プログラムの作成などを行っている。また、阪神・淡路大震災の教訓から、スリランカやネパールなど海外での防災教育活動にも精力的に取り組んでいる。



ヨン アルサル

インドネシア、ジャカルタ生まれ
神戸大学 大学院生

神戸市中央区の商店街が作成した震災時に必要なことをまとめた小学生向けの絵本を紹介され、それを翻訳して、インドネシアの小学生に配布する計画を立てた。また、2004年に発生したスマトラ沖地震の経験から、津波対策についても記述している。



ムルヨノ

インドネシア、ランブン州生まれ
神戸大学 大学院生

開会挨拶



河田 恵昭

(国際防災・人道支援協議会会長)

主催者として一言ご挨拶申し上げます。この「国際防災・人道支援協議会」は、東部新都心（HAT神戸）に集積する国際的な防災機関等が相互連携し、緩やかなネットワークを形成しております。このフォーラムは昨年まで、災害の教訓の「語り継ぎ」をテーマに実施しており、国際的な語り継ぎネットワーク「TeLL-Net」設立に寄与するなど、一定の成果を上げております。今回はその延長上で、「防災教育」に絞ってテーマを設定いたしました。

阪神・淡路大震災から12年が経過し、ここ神戸でも既に市民の4分の1が阪神・淡路大震災を経験していないことになっているなど徐々に震災の風化がはじまっております。しかし今後想定される首都直下地震や東海・東南海・南海地震や多発する風水害に備え、被害を少しでも軽減する社会を実現するため、防災教育は不可欠です。

次代を担う子供たちに震災の教訓を伝え、さらにこの災害多発時代にどう生きていくかの、重要な局面に差しかかっています。

私どもの協議会ではこうした試みを今後も継続することをお約束するとともに、防災学習の重要性を認識いただくことを祈念して開会の挨拶といたします。



東田 雅俊

(兵庫県防災監)

「国際防災・人道フォーラム2007」が、この兵庫の地で開催されますことをお祝いいたしますとともに、兵庫県民を代表して心から歓迎を申し上げます。

さて、震災から12年、県では、「阪神・淡路震災復興計画」を策定し、被災者とともに創造的復興に努めてまいりましたが、その過程で多くの支援をいただきました。県ではこの東部新都心（HAT神戸）に防災をはじめ、医療、保健、環境など様々な分野の国際的組織・機関を誘致し、その連携による国際防災・人道支援拠点の形成するなど、国際防災協力を推進しております。その中核が、この「国際防災・人道支援協議会」です。

次の災害に向け、震災の教訓を伝承することが重要です。本県では、1月17日を「ひょうご安全の日」と位置づけ、このフォーラムを含め、県民自らが災害の経験や教訓の発信、継承、啓発事業を支援しております。また、小学校低学年から高校生を対象とした防災副読本を作成し、学校教育の中で本県独自の防災教育を実施する取り組みも行ってまいります。このフォーラムは防災教育の具体的な施策につなげる意味で、まさに時宜を得たものです。このフォーラムが大きな成果が得られることを期待して、歓迎の挨拶といたします。

基調講演



「これからの防災教育」

国崎 信江

(危機管理対策アドバイザー)

皆さんこんにちは。国崎と申します。本日は「主婦の視点」、「母の視点」で感じて実践してきた防災教育をお伝えし、皆様の参考になればと思っています。

防災教育に関わったきっかけは、長男の誕生でした。阪神・淡路大震災の衝撃的な震災のニュースや報道を見て、「もし大地震が起きたら、私はこの子を守るであろうか」と思いました。「大切な命を守りたい」との一念が防災教育の原点でした。

2004年9月、ニューヨーク市の同時テロ追悼式典においてブルームバーグ市長が述べた追悼の辞に、「親を亡くした子どもを孤児といい、伴侶を亡くした夫を寡夫、妻を寡婦という。けれども子どもを亡くした親を呼ぶ言葉はない。その痛みを言葉で表すことができないからだ」とあります。もし大切な家族を震災で亡くしたらその苦しみが一生ついて回ります。痛みを体験した方々の気持ちを無駄にせず、私たちは何をすべきかを考えねばなりません。

私は震災で亡くなった子供や遺児から、親に命を委ねて暮らす家庭において、子供の命が脅かされてはならないと思い、家庭

での防災対策を重点に取り組みました。

家屋の倒壊による死者の多さから、自宅の耐震性が重要であること、さらに子供の視点に立つと、大きな家具、家電製品など、思わぬところに潜む危険に気づきます。

例えば電気炊飯器。実際に中古の炊飯器をブロック塀に思い切り投げたところ、塀にひびが入りました。もしこれが子どもの頭に当たったらけがではすまないと考え、子どもの目線から家に潜む危険を考え、防災対策をしてみいました。

さて、日本は災害の多い国であるにもかかわらず、なぜ安全意識・危機意識が芽生えないのでしょうか。

私自身、子供の頃から避難訓練は退屈、つまらないという負のイメージを持っており、地震時の対応方法をしっかりと学習していなかったのではないかと思います。ですから、今の子供たちに同じ思いをさせないように防災教育を変えてみようと思ったのです。

子供に身につけさせたい「生きる力」としては、

「これからの防災教育」

①「災害の恐ろしさ」を知る、そして「自然」を知る

自然がもつ豊かさと災害の厳しさの両面を認識し、「正しく恐れる」ということ。

②災害後の生活の様子をイメージできる

怪我や家屋倒壊、大切なものを失うこと、避難所生活、またそれが自分の将来にどう影響するのかといった災害後の生活の様子を想像できる力。

③災害への備えの大切さに気づく

災害の恐ろしさから事前対策の重要性に気づく。そして自然の力を止めることはできないが、災害を軽減するために自分はどうしたらいいのかと考える。

④過去の災害を教訓として学ぶ

地域の特性を考えた対策や先人の知恵を学ぶ。また災害は都市や文化とともに進化するので、これまでに起きていない問題も起こりうる。

⑤地域の人との交わりを大切にする。

自分の住む町に愛着を持ち、地域の人と助け合うことを学ぶ。

このようにトータルに「生きる力」を考え、実践できる力を身につけさせたいと考えています。

幼稚園児向けプログラムとして、ジャッキでの救出法があります。実際に災害の現場で使わないかもしれませんが、大人になった時に思い出すかもしれません。また救助体験をする子どもに、周りから「頑張れ」

「クマさんを早く助けてあげて」と声がかかります。防災教育は命の大切さも同時に育てる心の教育にもつながるのではないのでしょうか。

「だんごむしのポーズ」では、自分で自分の体を守ることを教えますが、それも普段の遊びに取り入れ、いざという時、先に体が動くという習慣をつける工夫をしています。



だんごむしのポーズ

家庭で不要となった古いシーツを包帯にします。これは普段から子供たちに作っておいてもらうのです。自分の名前やメッセージを書いてリボンで一つ一つ結んで保管します。こういうことで子供たちの優しい気持ちを残すことができます。

また、逃げる時に靴が必要であることを、ガラスに見立てた卵の殻を踏んでもらうことで、子供たちが自分から答えを出す、体で覚えてもらうよう工夫しています。つまり、体験を通して納得し、実践することが大事なのです。



ジャッキでの救出法



たまごの殻でガラス飛散実験

防災のきっかけづくりのため、いろんな切口をプログラムに取り入れています。生き物に興味を持つ子の場合、「本当になまらず地震を感知するの？じゃ、実際になまらず博士に聞いてみよう」という「なまらずの実験」、犬好きな子には災害救助犬の活動紹介、訓練デモを見ながら、防災に関心を持ってもらうプログラムもあります。

私の防災教育プログラムは幼児期からはじまりますので、発達段階に応じた正しい知識・内容の伝承が大事です。そのために不可欠な教材の開発も併せて行っております。

一方、海外での防災教育として、インドネシア・スマトラ島において、防災ソングや紙芝居もインドネシア語に訳して子供たちに伝えています。繰り返し歌うこと、自分たちで紙芝居を話してもらうなど、体験に重点をおきました。

インドネシア・バンダアチェの子供たちは、体験したことを劇にしました。劇に通じて、あるいはそれを見た子供たちの涙から彼らの心の叫びを感じました。



バンダアチェの子どもたちの被災体験の劇

早大と京大の学生さんと同行したこともあります。学生たちは通訳を使わず、事前に学んだインドネシア語で直接現地の子供たちに語りかけました。年齢が近いことで親しみを持ち、楽しい雰囲気がありました。

これらの防災教育の課題としましては、以下のようなものがあります。



早稲田と京大の学生からバンダアチェの子どもたちへ

- ①一過性や形式的な訓練でない展開
- ②自ら知識・技術の習得、判断力、知恵など生き抜く力を醸成する＝「自助力」
- ③家族や地域のために、自分はどのような存在であるべきかを意識し、リーダーシップの育成や人と人とのつながりを大切にする＝「共助力」
- ④指導者の育成
知識ある者が現地で教えるだけでなく、その知識を継続して教育できる人材の育成
- ⑤カリキュラム・教材の開発
学校や子供たちなどに自然に受け入れられるという導入手法
- ⑥防災教育のネットワークづくり
個々の防災教育の知識、プログラムのネットワーク化、情報共有

さて、子供の防災教育の場としては家庭が不可欠です。家庭で災害から自分の身を守ることを教えれば、何より身につくと考えています。

私は応急手当の講習や地域の避難訓練などに子供と一緒に参加することを心掛けました。

ある日、エレベータに乗った際、長男が操作盤のたくさんのボタンを押そうとします。これはいたずらではなく、地震の時は多くの階を押して、開いたところから逃げるといった防災センターの方の話を聞いていたのです。子どもは興味の有無にかかわらず、いろいろなところに連れていくこ

「これからの防災教育」

とで知識を吸収するのだと思いました。

子どもが物心つく前から、家具や家電製品から、写真立てに至るまで固定するなど家中の防災対策をしました。夫は面倒くさがりますが、子どもはそういうものだと思いますので驚くほど手際よくストッパーを外して使っています。

私がうっかりストッパーを忘れると、気になって仕方がないようで、すぐ指摘されます。

長男が1歳8か月の頃から毎年、消防局主催の応急手当の講習に家族で参加しています。私の心配をよそに、子どもは真剣に話を聞いています。「まだ3歳だから、応急手当は早い。時期が来るまで無理」と思っていました。そうではないのです。そこでむしろいろいろなところに連れていくようになりました。

子どもは正直で、洞察力が鋭いものです。子どものために無理するのではなく、まず大人が楽しもうとするだけで、子どもにも興味を持ってもらえるのではないかと思います。

発達段階に応じて、自分でできるトリアージも、子供に教えています。

「トリアージとは」からはじまり、専門医にすぐ診てもらえない場合、「自分でできることがあるんだよ。つめをぎゅっと押して、ぱっと離して、1～2秒以内に赤みが戻ったら重傷ではないよ。戻らなかったら体に変なことが起きているのだから、すぐお父さんお母さんに言ってね」ということまで教えます。こうした身近なものでも有効です。

子供から大人に教える防災教育があるようです。実際に私の母（子どもにとっては祖母）が孫から教わることで興味を持つようになるなど子供から大人へ刺激を与えて、気づきを与えることもあるのです。

最後に、知識・プログラムの他、物（防

災用品）も必要です。例えば、18年9月に日本で初めて、国家検定を受けた飛来落下用の防災ヘルメットの子供用が開発されました。日本ではこれまでの子供の防災用品は、防空頭巾が名前を変えた防災頭巾だけでした。これを皮切りに日本でも子供を直接守る物の開発が必要だと思いました。

この後パネルディスカッションに参加しますので、その時にも話をしたいと思いません。どうもありがとうございました。

《質疑応答》

（質問者）インドネシア・バンドアチェでの防災教育について、文化・習慣など日本とでは全く違うと思いますが、現地に合った防災教育の留意点をお聞かせください。

（国崎）相手国の文化や生活習慣に気をつけました。表現もそうですが特に宗教的な部分です。私たちは現地のコーディネーターの方に、彼らが受け入れやすい表現やなじみのある言葉を教えてもらいました。環境や地域特性を考え、バンドアチェを中心とした地震メカニズムの教材作成やバンドアチェに適した防災の提案なども行いました。

また、あれだけの被害の中でも子供たちの表情は明るいのです。これは「これは神から与えられた試練」と受け止め、乗り越えようとする宗教的なことから来ています。このことを考慮しつつ地震のメカニズムをどう伝えていくかを教材に盛り込みました。

パネルディスカッション

コーディネーター：矢守 克也（京都大学防災研究所助教授）

パネリスト：中野 元太（立命館大学国際関係学部）

ヨナルサル（神戸大学大学院・インドネシア留学生）

ムルヨノ（神戸大学大学院・インドネシア留学生）

国崎 信江（危機管理対策アドバイザー）

※パネルディスカッションに先立ち、コーディネーター、パネリストによる、それぞれの活動等についての報告が行われた。



矢守 克也

（京都大学防災研究所助教授）

7つの視点

1. ハードとソフトが融合した防災教育
2. 地域をつなぐ防災教育
3. 世代をつなぐ防災教育
4. 「助かること」だけでなく「助けること」を重視した防災教育
5. 成果物を生みだしながら学ぶ防災教育
6. 生活に根ざした防災教育
7. 「正解を学ぶ」だけでなく「みなで考えること」を目指した防災教育

皆さんこんにちは、矢守と申します。私からは防災教育に関する重要な7つの視点を紹介します。

まず、1つ目は「ハードウェアとソフト

ウェアが融合した防災教育」です。

例えば、「稲むらの火」^(注1)のように、地域を津波から守る堤防（ハードウェア）、そのハードウェアがそのありがたみとともに物語となって引き継がれる（ソフトウェア）。こういうハードウェアとソフトウェアが融合した防災教育が重要だと思います。

2つ目は「地域間をつなぐ防災教育」です。

昨年の「災害メモリアル Kobe」というイベントで、中越大地震や豊岡の水害などを体験した子供たちと、ほぼ同年齢で震災の記憶のない今の神戸の子供たちが交流する中で防災を学ぶという企画がありました。その中で新潟と豊岡の子供たちは、それぞれ体験談を話し合うことで励まし合えたのではと思います。

3つ目は「世代をつなぐ防災教育」です。

私が参画している「語り部 KOBE1995」というグループのある活動を紹介します。そのグループの中高年層のメンバーが神戸学院大学の「防災・社会貢献ユニット」の学生に震災の体験談を話します。さらに震災当時小学生だったこの学生たちと当時の大人だったこのメンバーたちが一緒になって、小学校に話をしに行くのです。つまり3世代にまたがる防災教育を展開するという試みです。

防災教育は、知識や技能のある人による

パネルディスカッション

一過性の教育をだけでなく、何世代にも続いていく仕組み作りが重要です。それは、次の災害が次の世代さらに、次の次や、その次の世代で起こる可能性が高いからです。

4番目は、「助かることだけでなく助けることを重視した防災教育」です。

避難訓練だけが防災教育だと感じるところから、防災に対して積極的に踏み込まず、あるいは同じことの繰り返しだとか、自分なりの工夫ができないとか、そうした否定的な態度も出てくるのだと思います。大きな災害が予想される今日、むしろどうすれば被災地を助けることができるかということに防災教育の焦点を移してほしいところです。

さて、そろそろ時間ですので、残りの3つについては、あとのディスカッションの中で補うことにして、次のスピーカーに譲りたいと思います。

(注1) 稲むらの火

一人の老人が地震後、津波が襲ってくると予感し、収穫した大切な稲むらに火を放ち、村人をこの火を目印に誘導して安全な場所に避難させ、その多くを救ったという物語。

後に、将来の津波に備え、大防波堤を建設した。



中野 元太

(立命館大学国際関係学部)

皆さんこんにちは。中野と申します。今日は、ネパールとスリランカでの取り組みをお話したいと思います。

ネパールには高校時代に3回訪れました。そこでの活動の目的は、①社会の防災力の脆弱性を知る、②阪神・淡路大震災の経験と教訓を伝える、の2つです。

まず、建物の脆弱性です。ネパールでは多くが日干しれんが造りの家で、子が独立する度に次々と上に建物を継ぎ足していく文化があるため、不安定な建物が多く、他にも穴の開いた壁のある建物や半分崩れている建物が多々あります。

ネパールでは近い将来に大地震が起これるといわれており、こうした町の人たちに何か伝えられればと思って活動してきました。

1つ目が学校訪問です。これは文化交流を踏まえながら、楽しみの中にもやはり防災の視点を含めて、文化交流の合間に私たちの震災体験を話したり、もしくは僕たちが舞子高校環境防災科でまとめた冊子を英語に翻訳し、現地の先生や生徒に手渡しました。

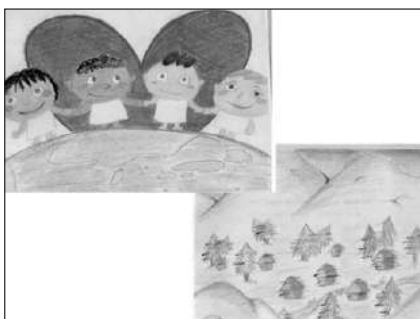
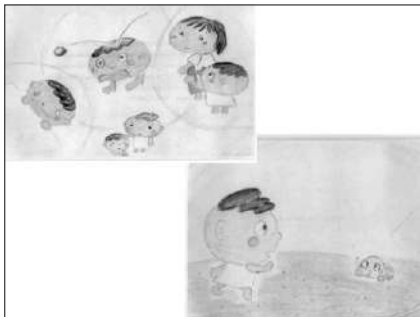
現地で開催された地震防災学生会議にも参加し、高校時代の取り組みや震災体験な

どを現地の人たちに伝えたり、現地の方々とディスカッションを行うなど、交流を深めました。

次にスリランカの活動です。ここでは、①心のケアに関する活動、②阪神・淡路大震災の経験と教訓を伝えることを目的としました。

スリランカは、2004年末に発生したインド洋大津波で大きな被害を受けました。スリランカのある友人は、自分の家や思い出をすべてなくしてしまったつらい体験を話してくれました。あれから1年が経過しても心に大きな傷が残った人たちが数多くいるのだと思い、現地で何かできることがあるのではと活動を行いました。

心のケアの絵本があります。地震で子供が大きなショックを受けると、悪夢を見たり、些細なことにも反応するなど不安定な状態に陥るそうですが、周りの人たちがそれを受け入れ、安心な環境を作ることで落ち着いていくのだといった内容です。



活動に用いた絵本（抜粋）

この絵本は実際にスリランカやインドネシアで同様の活動をしてきた専門家やスリ

ランカに永年住んでおられる方に話を聞き、現地の文化や習慣を配慮して作りました。

そして単に読み聞かせるだけではなく、現地の学校の先生に防災教育の教材として手渡したところ、実際に絵本を用いた活動を行ったそうです。私たちが去った後でも継続する、そうした防災教育も重要です。

震災体験も伝えました。大地震発生前のネパールでは、まず「地震」というものを知ってもらうということを、災害を経験したスリランカでは、神戸の復興した姿を見せ、自分たちも努力することで同じように復興できるという希望を与えることを目指しました。

これで私の発表は終わります。どうもありがとうございました。



防災教育の教材として手渡した



ムルヨノ

(神戸大学大学院・インドネシア留学生)

皆さんこんにちは。ムルヨノと申します。最近ではインドネシアにおいて何度も災害が起こっています。我々の活動が少しでも役立つとうれしいです。

これは世界の地震の発生確率ですが、日本やインドネシアはとても確率が高いです。

さて、2004年スマトラ大地震の全死者のうち60%がインドネシア人でした。その理由はむしろ津波です。インドネシア・バンダアチェ周辺の生存者は、大きく高いところに逃げた人たちと泳ぐことのできる人たちです。アチェ州のシムル島では大地震があればすぐ高い所へ逃げるといった習慣が受け継がれています。実際二人ぐらしか死にませんでした。そういう習慣を次の世代に伝えることが大切です。



世界の地震の発生確率

一方、私の知人で、同じく神戸の留学生ですが、その年の9月に卒業し、バンダアチェに帰って被災しました。6人家族ですが子供2人は通っていた御影小学校で水泳を習っていたのです。私はその家族が亡くなったと聞いてとてもショックでしたが、泳ぐことのできる2人の子どもは助かったそうです。

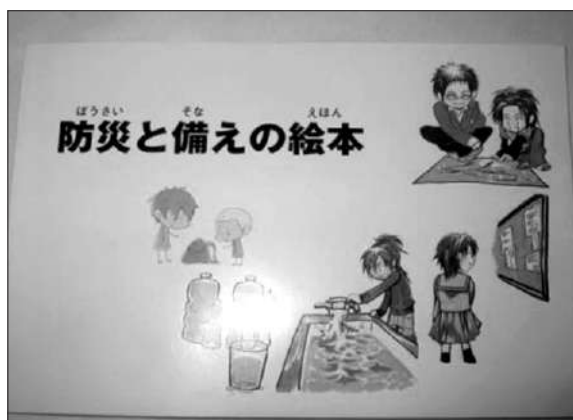
ジャワ島ジョグジャカルタの地震では、阪神・淡路大震災とほぼ同じ6,234人が犠牲になりました。原因は建築の構造が考えられます。もちろん安全な家がいいのですが、生活のためそのような余裕がありません。これが被害を大きくした理由だと思われます。

私は、防災意識を上げることや防災訓練などを通して被害を減らすことができるのではないかと考えています。

子供たちへの防災教育も重要です。国崎さんの話にもありましたが、子供は熱心に学びますし、家族や周りの人にも伝わります。また子供のころから防災の基礎知識は将来の災害への備えに役立ちます。

私たちインドネシアの留学生は子供たちのために『防災と備えの絵本』という防災教育の絵本を翻訳しました。^(注2)

この本は、神戸市にある「大日通周辺地区まちづくりを考える会」によって描かれ、震災の経験をもとに次世代の子供たちに、地震や台風の被害を少しでも軽くするため



子どもたちのために防災教育の絵本を翻訳した

の絵本です。

しかし単なる翻訳ではなく、例えば阪神・淡路大震災でなかった津波の内容を入れたり、文化や習慣の違いについても、インドネシアにあうように直しました。

最後に、個人だけではなく、政府、NGO、学生などみんなが責任を持って日本だけでなく、海外にも防災を伝える取り組みを行う必要があると思います。ただし、その際は、異なる国の文化を知り、その地域に応じたものにする必要があります。

(注2) 2007年3月末に完成し、彼らの母国、インドネシアに送られました。

《ディスカッション》

(矢守) ではこれより、ディスカッションに移ります。

まず、国崎さんの方から、パネリストの方の報告から感じたことや議論すべき点を問いかけていただき、それに対してパネリストの方にそれぞれ回答いただきます。

(国崎) 中野さんの活動の中で、私にはなくて中野さんにあるというものの一つに、自らの被災体験を伝える重み、そして同じ立場の子供たちに伝えるという同じ目線で語れる強みがあると感じました。質問としては、中野さんの海外での活動の後、現地の人たちがどのような活動を始めたのかを教えてください。

(中野) ネパールの学校で知り合った生徒の家に行きました。1年目は本当に鉄筋が入ってなくて耐震化されていない家でしたが、2年目に訪問した時は、耐震化の工事中で、3年目は、地震に強い家になっていたという事例です。ネパールというのは学校が地域の中心として機能しており、学校に伝えることで子供に伝わり、その子供を通じて親にも伝わる。直接親が学校に集まることもあるので直接伝えることができる。そうして、僕たちの話を聞いて行動された方もいらっしゃいます。

またその学校には、防災教育の活動をする地震防災委員と呼ばれるクラブの生徒たちが自分たちで防災に関する劇を作って披露したり、実際に首都カトマンズで行われたイベントで一般の人に披露するなど、防災に関する活動が広がってきていると実感しています。

(ヨンアルサル) 津波災害後のインドネシア政府の政策ですが、防災コミュニティを確立するためには一般人の防災認識が重要



ヨンアルサル

(神戸大学大学院・インドネシア留学生)

だと気づきました。これは政府だけでなく地域社会全体の責務だと思います。NGO団体や私たちのような在日留学生が、インドネシア人の意識啓発のために何らかの貢献をすべきだと考えています。インドネシアは災害が多く、この津波災害では死傷者が多数出ました。だから、防災の情報や知識を、特に次世代を担う子供たちに周知することが重要だと思うようになりました。子供たちは習得が早いだけでなく、素晴らしいメッセージャーでもあります。例えば、親たちに十分な教育がなされていないインドネシアの農村部では、読み書きのできる子供たちが大切な伝達者です。だから、この本をインドネシア語に翻訳しているのです。絵本のように読みやすく理解しやすいものであれば、子供たちは得た知識を家族に伝えることができます。

(矢守) 今、「メッセージャー」というキーワードが出ました。単純に情報を伝えるだけのメッセージャーという意味ではなく、両親の防災教育等が十分でない子供たちのために、ムルヨノさんやヨンさんのような方が出かけていき、さらに文化・習慣の違いに配慮したメッセージャーとなる。この

ように「メッセンジャー」にはいろいろな意味が込められていると、ヨンさんの話から感じました。

(国崎) 他の国の災害と同じようなことが自分の国でも起こるかもしれないという意識で考えていくことが大切とのことでしたが、矢守さんの「7つの視点」にあった、「助かるだけではなく助けることを重視した防災教育」ということで、ヨンさん、ムルヨノさんたちが絵本を作られて、今後インドネシアの子供たちに災害が起こった時にどうすればいいのかを伝えたり、さらに他の国の子供たちに伝えたりという活動についてどうお考えなのかを教えてください。

(ムルヨノ) 国崎さんのような専門家がいらっしゃったら、インドネシアだけではなく、近隣の国ともつなげられると思います。2004年にスマトラ地震が起こって、我々留学生としてどうすればいいのかを考えました。直接インドネシアに行くのは困難でしたが、我々は活動の中でいろんなことを人々に伝えました。例えば神戸大学の留学生センターで国際リンクもありまして、その中でも伝えるのは可能と思います。

(矢守) 今の「リンク」というのは、ネットワークを使って防災教育をさらに広げていく、あるいはその防災教育に新しいプレーヤーとして入ってもらうという趣旨のようです。

「七つの視点」の1つ、世代を超えた防災教育とは、要するに「持続可能」ということです。その場の防災教育だけではなく、世代を超えて続けていく。空間的に見れば日本のみならず海外に連鎖的に広がっていく仕組みづくりが大事だと思います。

では、みなさんのネットワークの中での防災教育推進についてお願いします。

(中野) 高校1年生から防災を学び始めましたが、その時から神戸や周辺地域の様々な防災の専門家が学校にお越しいただき、防災に関する話を伺いました。専門家の方からさまざまなことを伝え聞き、そのネットワークの中で僕が歩んできたと感じています。

それから、学校以外の様々なイベントでも、活動の輪の中に招いていただいた方が多くいらっしゃいます。このように防災の活動をしている人が、また同じような人に伝えていただくことで、参加させていただいたことに感謝しています。

(矢守) この神戸という地に舞子高校という仕組みがあること、それから舞子高校の教育システムの中で国連やJICAの方々と触れ合う機会が多くあるなど、ネットワークがあるということはすごく大事だと思います。

ヨンさん、ムルヨノさんのお二人は、防災教育の取り組みの中で、インドネシア留学生の方のネットワークがあるとのことですが、インドネシアにおいてそのネットワークが防災教育どう生かされているのかを教えてください。

(ヨン アルサル) 実際、在日インドネシア人留学生協会というネットワークがあります。ムルヨノさんと私は神戸支部所属ですが、他にも東京、大阪、京都など日本全国に多くの支部があります。留学生協会以外では、大学から大きな支援を頂いています。留学生センターや、日本人のボランティアの友達の存在があります。日本国内での活動支援は非常に大きいです。インドネシアでは、いくつかのNGO団体と連携しています。例えば、日本で2004年の地震・津波災害支援の募金活動をして、インドネシアに送金する時などです。活動をより効

果的にするために、神戸大学などに留学し、インドネシアに帰国した卒業生グループとのリンクも持っています。インドネシア国内のNGO団体とは、また別の関係やつながりもあります。私たちの目的は、こうしたリンクにより、日本で得られるものをインドネシアでより効果的に実施することにあります。

(矢守) インドネシア国内でもNGOを中心に、日本国内だけでないネットワークをお持ちのようです。一方、国崎さんも早大や京大生たちとのジョイントの話がありました。

(国崎) 私たちはEWBジャパン「国境なき技師団」という団体で国際的な防災教育というものをしております、私たちが知らないだけで、世界的にこの防災教育に重点を置いた活動をしている組織はたくさんあると思いました。

私たちのグループの京大生や早大生以外にも、同じような国際的な防災教育の活動を行っていることも分かりました。彼らが使う教材や知識の共有化や、活動の協力によって、もっと効率的で効果の高い防災教育ということができると思います。様々な国際的な組織の方々ともネットワークを広げていければと考えております。

(矢守) 防災教育ツール、防災教育のプログラムなどユニークな試みが数多くあるのに、情報の共有ができていません。今後これまでの防災教育のためのプログラムやツールやネットワークを共有、整理し、パッケージ化する段階に入っていくべきです。

さて、最後に防災教育のポイント、特に国際的な防災教育を進めるうえでのポイント、成功の鍵や課題などをお願いします。

(中野) 成功の鍵、困難な課題、両方とも含まれますが、「一目で見て分かる防災教育」が一番重要だと考えています。普通の科目と異なり、防災教育は、理解した上でさらにそれに行動に移さない限りは、意味をなしません。

そのために、私たちが話し伝えたり、あるいは双方向も一つの手段です。生徒が主観的に見て実感できる手法が必要だと思います。

(矢守) 「一目で見て分かる防災教育」というキャッチフレーズでした。学ぶ側が主体的にかかわって考えたり工夫したりできるような防災教育のあり方が大事だというのが、中野さんの経験から得た教訓のようです。

(ヨンアルサル) 最も重要なキーワードの1つは、「人々の意識向上や防災教育を通して、災害により強い地域社会をどう築いていくか」です。しかし、問題は山積みです。発展途上国が直面する専門知識の欠如と財政難の問題です。また、目的を遂行するための国際関係が必要です。問題解決には、もう1つのキーワード「優先順位」を決めなくてはなりません。例えば、どの分野の人を教育するべきか。特に十分な背景知識がない大人たちや地域社会に防災知識を広めることは、非常に困難です。ムルヨノさんの繰り返しですが、子供たちの教育に焦点をあてる必要があります。学校のカリキュラムに入れるなどの公式的な教育でも非公式の教育でもいいです。そうすれば、小学校など早い時期から自然災害や人為災害について基本的な科学や知識や防災方法など防災教育を受けることができます。私はこれが最も大切なことだと思います。

(ムルヨノ) 国崎さんの話にもありました

が、1点目は楽しみながらの防災教育が一番です。防災を学ぶ側にその気持ちがないとダメです。

2点目は、他国に防災の知識や経験を伝える際、地域によって異なる文化や習慣を理解し、その地域の条件に応じたものに直して伝えるということです。

(国崎) キーワードは「継続」です。同じ内容を繰り返し伝えていくことも継続ですが、成長するごとに、その内容に応じたものを段階的に提供することも必要だと思います。

その継続の中には、地震だけではなく、犯罪や事故など命を脅かす危険に応用できるものを伝えていくことも含まれます。そうしたことを、家庭や教育現場、地域、それぞれの役割に応じて息の長い活動をしていきたいです。そして次世代や今後、そうした情報を必要とする国にも伝えていくことが大切だと思います。

私がバンダアチェで「稲むらの火」を上映した際、「津波が起きたら高い所に逃げろ」という言い伝えをなぜ地震の前に教えてくれなかったの。このビデオを見ていたらもっと多くの方が助かり、家族と幸せに暮らしていたかもしれないのに」と言われました。言葉が出ませんでした。今後必要とされる国にも積極的に防災教育の必要性を訴えていきたいです。

《質疑応答》

(矢守) では、会場からご質問やコメントをいただきたいと思います。

(質問者1) 矢守さんの「七つの視点」の5つ目「成果物を生み出しながら学ぶ防災教育」について、成果物の意味と、パネリストの活動の中での成果物について、お聞かせ下さい。

(矢守) 例えば国崎さんが防災ソングをインドネシアに伝えたことを例にすると、それを単にインドネシア語にするだけではなく、地域にあうようアレンジすることで現地の方も「インドネシア版の国崎さんの歌」という成果物の制作に一役買っています。つまり「防災ソング」で防災を学ぶとともに、実際に関わりながら学んでいる、という意味です。

(国崎) 子どもに興味をもってもらうことを意識し、試行錯誤しながらですが、先ほど申し上げた絵本、紙芝居、歌、生き物などが成果物だと思います。

私はなるべく災害時のイメージを持ってもらう工夫をしています。被災者の体験談を聞くのもいいですし、映像や防災センターなどに行って、実際に体験するのもいいです。いかにリアリティを持たせ、息の長い活動をしてもらうかということが大事だと思います。

(質問者2) 中野さんは阪神・淡路大震災の大変な経験があり、同じく甚大な被害を受けたスリランカでの経験もお持ちです。興味深いのは、大きな災害が何十年も起きていないネパールでも災害管理の活動をされ、人々が災害対策を進めているという点です。地震など大災害の記憶のない地域の人々について中野さんがどう考えているのか。大災害を知らない人達に防災への関心を持たせるのが難しいため、どうやって防災の手順を納得させればよいのでしょうか。どうすればこうした人に理解してもらって見直しを始めてもらうことができるのでしょうか。ネパールで、とりわけ防災の文化について人々に納得させるような大災害が起きたことのない土地で、何を感じられたのでしょうか。

パネルディスカッション

(中野) 地震の記憶がない、または地震を知らない人たちにどのような防災教育をしていくのかであると思います。とりわけ「一目で見て分かる防災教育」が必要だと思います。ネパールでも同じで、ネパールの人たちが「本当に地震が起これば、私の家が崩れるのだ」とか、「こうしておけば大丈夫だ」と気づいてもらうところから始めていきたいです。

(矢守) 災害の体験がない方に伝えるのは困難ですが、地震や津波などのリアリティを高めて伝えることが大事です。これは「一目で見て分かる防災教育」につながると思います。

また、大きな災害を経験したことのない方は今の生活というリアリティがあります。その人の今の生活にとって重要な事や関心のある事ことなるべく防災の問題を引き付ける。防災という問題をアレンジし、その人にとってのリアリティに引き寄せるといったアプローチもあります。これは私の視点の6つ目「生活に根ざした防災教育」にあたります。

(質問者3) 私が防災教育で感じているのは保健・医療の視点です。国崎さんがトリアージについて触れましたが、大きな災害が起こった時の心肺蘇生や心のケアの問題、子供や老人、ハンディキャップの方など災害弱者を優先的に病院に運ぶべきだとか、難病の方々の対応をどうするか、等を防災教育にも取り入れて、子供の頃から知ってもらうことが大事ではないかと思います。

(国崎) 私も、トリアージを子供に教えたり、応急手当も3歳のころから子供も一緒に学ばせたりということで、いろいろ自身に置き換えて、それから相手を救えるかもしれないという知識は持つておくこと

が、生きる上で大切だと思いますし、自分が災害時の要援護者になるかもしれないということを常に意識して伝えています。

「災害時要援護者」と聞くと、自分が助ける側だと考えがちですが、仮に階段から転んで骨折したり、熱が40度以上になって動けない場合、これはもう要援護者です。これを自分の身に置き換えて、今困難な立場にある方の視点で考えていかなければならないということを伝えております。防災教育においてもこのように多彩な内容をバランスよく含めていければいいと思います。

(矢守) 先ほどの語り部グループの方で、震災で家の下敷きになり娘を亡くしたという方がいます。福知山線脱線事故で、その経験を踏まえた現地での治療がようやく日本でも始まったと聞き、「12年前になぜ自分の娘にそうした治療ができなかったのか」ではなくて、「この語り部活動が少しずつ実を結び始めてきて、すごくうれしい」と話されています。

医療、保健にかかわる内容も、この防災教育に盛り込んでいく必要があると思います。その時に、正確な情報を伝えていくという手段もありますし、一方では、人間の生々しさは現場にこそ現れると思いますので、語り部さんのお話や映像などメディアによるアプローチも大事だと思います。

ではこれで今日の一連のプログラムを終わりたいと思います。

どうもありがとうございました。

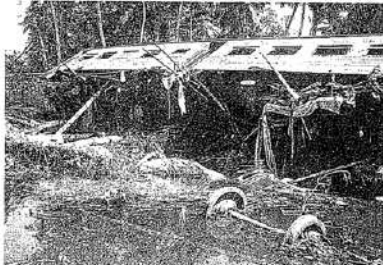


パネルディスカッション

参 考 资 料



インドネシアの被災地で子どもたちと交際する河田さん



インドネシア被災地は列車を押し流した

これからの防災教育

危機管理対策 アドバイザー 国崎 信江さん

「危機管理対策」のアドバイザーとして、防災教育の現場で活躍する国崎信江さん。国崎さんは、防災教育の現場で、子どもたちに防災意識を伝えるために、様々な工夫を凝らしている。国崎さんは、防災教育の現場で、子どもたちに防災意識を伝えるために、様々な工夫を凝らしている。

基調講演



防災教育の先進的な事例を紹介し、今後の取り組みについて議論する「国際防災・人道支援フォーラム2007～防災教育の取り組み～」(国際防災・人道支援協議会、兵庫県主催)がこのほど、神戸市中央区のJICA兵庫国際センターで開催された。

神戸市東灘区を中心に立ち上げた国際防災・人道支援協議会が主催する「国際防災・人道支援協議会」の活動の一環、国際防災・人道支援協議会(会長 河田恵昭)の活動の一環として、河田恵昭さんが基調講演。京大防災研究所助教授の中野元志さん、立命館大学防災研究所助教授の中野元志さん、インドネシアからの留学生で神戸大学大学院生のヨシノアルさん、ムルヨノさんによる基調講演の後、今後の防災教育について語り合った。

国際防災・人道支援フォーラム2007

「国際防災・人道支援フォーラム2007」は、神戸市東灘区を中心に立ち上げた国際防災・人道支援協議会が主催する「国際防災・人道支援協議会」の活動の一環として、河田恵昭さんが基調講演。京大防災研究所助教授の中野元志さん、立命館大学防災研究所助教授の中野元志さん、インドネシアからの留学生で神戸大学大学院生のヨシノアルさん、ムルヨノさんによる基調講演の後、今後の防災教育について語り合った。

自らを守り他を助ける まず家庭での親子学習

「防災教育の現場で、子どもたちに防災意識を伝えるために、様々な工夫を凝らしている。国崎さんは、防災教育の現場で、子どもたちに防災意識を伝えるために、様々な工夫を凝らしている。」

防災教育に共通認識を 国際防災・人道支援協議会会長 河田 恵昭さん



河田 恵昭さん

防災教育現場からの報告



ヨシノアルさん



ムルヨノさん

「防災教育の現場で、子どもたちに防災意識を伝えるために、様々な工夫を凝らしている。国崎さんは、防災教育の現場で、子どもたちに防災意識を伝えるために、様々な工夫を凝らしている。」



パネル・ディスカッション

世代をこなし、世界をこなし

「防災教育の現場で、子どもたちに防災意識を伝えるために、様々な工夫を凝らしている。国崎さんは、防災教育の現場で、子どもたちに防災意識を伝えるために、様々な工夫を凝らしている。」



長守 英樹さん

「防災教育の現場で、子どもたちに防災意識を伝えるために、様々な工夫を凝らしている。国崎さんは、防災教育の現場で、子どもたちに防災意識を伝えるために、様々な工夫を凝らしている。」



中野 亮太さん

「防災教育の現場で、子どもたちに防災意識を伝えるために、様々な工夫を凝らしている。国崎さんは、防災教育の現場で、子どもたちに防災意識を伝えるために、様々な工夫を凝らしている。」

「防災教育の現場で、子どもたちに防災意識を伝えるために、様々な工夫を凝らしている。国崎さんは、防災教育の現場で、子どもたちに防災意識を伝えるために、様々な工夫を凝らしている。」

「防災教育の現場で、子どもたちに防災意識を伝えるために、様々な工夫を凝らしている。国崎さんは、防災教育の現場で、子どもたちに防災意識を伝えるために、様々な工夫を凝らしている。」

国際防災・人道支援フォーラム 2007 報告書

－ 防災教育の取り組み －

平成19年2月28日発行

発行／国際防災・人道支援フォーラム実行委員会

事務局 人と防災未来センター事業課

〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1丁目5-2

TEL:078-262-5068 FAX:078-262-5082